

しい
ほの
サ
ハセ



張
野
反
理
子

ク
ロ
ス
フ
レ
イ
東
松
山

じ
い
は
の
花

浅
野
友
理
子

はじめに

本冊子は、二〇二六年三月から四月にかけて、埼玉県東松山市の高齢者福祉施設「デイサービス楽らく」に滞在した浅野友理子さんによる、植物を題材とした木版画作品を収録したものです。

花や草木をはじめとする植物は、デイサービス楽らくの利用者、職員、そしてこの地に暮らす人々にとって日々の暮らしに寄り添う身近な存在です。季節の移ろいを感じさせるものとして。山や畑で親しんできた懐かしい記憶として。また、家庭で大切に育てている存在として…。

植物をめぐる一つひとつの語らいには、それぞれの人が大切にしてきた記憶や思い出、そして地域に受け継がれてきた文化が息づいています。

滞在中、浅野さんは利用者や職員、地域の方々との交流を重ねながら、12点の植物の版画作品を制作しました。

日々の会話の中で話題にのぼった植物を題材に版を彫

り、その制作の様子を利用者の方々が見学したり、ときには一緒に版画を刷ったり色を塗ったりするなかで、植物にまつわる思い出や記憶が自然と語られていきました。浅野さんの滞在期間中、デイサービスでは植物をめぐる会話が施設のあちらこちらで花開いていました。

本冊子では、浅野さん自身の執筆により、題材となった植物にまつわるエピソードや、滞在中の印象的な出来事を、木版画とあわせて読み物として収録しております。穏やかな時間やその場の空気を少しでも感じていただければ幸いです。

最後に、本プロジェクトにご協力いただいた皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。一つひとつの出会いの積み重ねによって、本冊子は形となりました。皆様のご支援とご協力に、深く感謝申し上げます。

クロスプレイ東松山事務局

今年の春、デイサービス楽らくで滞在制作の機会をいただきました。

利用者さんの中には、東松山で生まれ育った方々もいれば、様々な土地で生まれ育ちながらも、縁があつてここに来たという方もいらっしゃいました。ここにゆっくり滞在させてもらいながら、日々訪れる皆さんに、植物にまつわるお話や思い出をお聞きしてみたい。ケアの現場に入るという緊張感と戸惑いもありましたが、自分ができることで、何か関わることができたら嬉しい。

利用者さんや職員さんたちと一緒に何かを作れたらと、表現方法を模索していく中で、「木版画」という手法を選びました。絵を描くということはとてもシンプルだけど、少しハードルが高く感じる方も多い。ぬりえは利用者さんにとっても日常の取り組みの一部に

もなっていて、これなら何か形にしていけそう。

楽らくに寝泊まりしながら、毎日ここに来る利用者さんに、植物のお話を聞く。春に咲く植物、お家の庭で大切にされている植物、ここ唐子地区での思い出の植物、この土地に限らず、それぞれが生まれ育った土地の記憶のなかの植物たち。

そうして三月と四月、二回に渡って、約一カ月の滞在。多目的室の一角で、日々出会った植物の姿を版木に彫り、この地域の和紙に刷って、色を塗ってもらう。

植物を通じてそれぞれの思い出に触れたり、版画の工程をみていただいたり、一緒に刷ってみたり。デイサービス楽らくの日常に参加させてもらう中で、利用者さんの新たな一面が見えたり、私自身も個人的な記憶を思い出したり

と、ふっと心が動く瞬間がいくつもありました。

順調に進みながらも、これで良いのかなと考えているとき、職員さんの言葉が心に残りました。

「ここに通う方々が、人生の中の大切な時間を過ごす場所で、おだやかに、とにかく少しでも良い時間を過ごしてもらいたい。」滞在アーティストとして関わりながら、まずはできることをやって楽しんでもらいたいと、シンプルに考えることができました。

お話を聞かせてくださった利用者の方皆さん、そして日々相談に乗ってくださり一緒にこの機会を過ごしてくださった職員の皆さん、クロスプレイ東松山の皆さまに、心より感謝申し上げます。

浅野友理子

福寿草

三月の東松山でまだ春の植物をみつけれずにいると、職員さんから、「桜の木がみえるお寺があるよ」と教えてもらった。

お寺に向かうと、ちょうど早咲きの桜が見ごろを迎えていた。

お寺の中庭を歩いてみると、いくつもの春の花々が咲き始めていた。その中で、黄色い蕾を付けた福寿草に目が留まった。

むかし植物に詳しい方から、「春に一番最初に咲く黄色い花」と教わったことがあった。

今回の滞在で、最初に彫り始めたのが福寿草だった。

そこから春の植物がどんどん咲いた。

良い時期に滞在の機会をいただいた。

利用者さんと何か一緒にできることはないかと考えて、ミツマタ、じいば、白瓜と4種類の版画を刷って、ぬりえをしようことになった。

とくに福寿草の花は人気で、植物に忠実に塗る方もいれば、墨の上から、ピンクや青で、何色も重ねながら自由に塗る方もいた。最初は迷っていた方も、思わぬ色使いがとても豊かで、できた作品を並べてみると1枚1枚に個性があつておもしろい。それぞれの福寿草ができあがっていた。



福寿草

ミツマタ

せっかくならこの土地の和紙を使って、版画を刷ってみたい。

近隣の小川町、東秩父村で受け継がれる手漉き和紙があると知り、現地を訪ねてみることにした。

和紙工房の広い庭にはたくさんの植物が咲いていた。どれでも摘んできて押し花にして良いですよ、と職人さんが言った。工房の水面でうるかされた椿（つばき）、トロロアオイの根などをみせてもらう。庭は日本庭園のようになっている、早咲きの桜、冬を越えた椿の花、もっと山の方に登っていくと春の山菜なども見ることができそうだった。

庭園の中に、見慣れない黄色い花が咲いていて、気に入って採集した。それは和紙作りに使うミツマタの花だった。

ミツマタの花びらを採集して、漉き途中の和紙に乗せて、押し込んで乾かす。
楽らくに戻って、さっそくミツマタの木版画を彫り始めた。

名前の通り、木の枝が三つに分かれている。

翌朝、利用者さんに「この花はわかりますか？」と尋ねると、すぐに「ミツマタ」と返ってきた。話を聞いてみると、利用者さんや職員さんたちの中にも小川町生まれの方がいらっちゃって、子供の頃は卒業証書に使う和紙を、自分で漉いたことがあるそうだ。

厚くて丈夫な白と生成色の和紙を買ってきて、塗り絵用の和紙が一人一枚まるるように刷っていった。



ミツマタ

白瓜

利用者さんから、昔はこのあたりで白瓜を栽培していたと聞いた。

^{かみからこ}上唐子のあたりに忠勇という神戸の漬物工場があつて、収穫した白瓜から奈良漬けや朝鮮漬けを作っていたそうだ。

私が宮城から来たと話すと、仙台から働きにきていた女の子の話をしてくれた。

「種とりの仕事で、休みの期間に種採りのバイトしにきていたの。」

校長先生に連れられてきて、いつも泣いていた。中学生だったからね。」

「いまは原っぱになったけど、瓜やメロン、スイカも作っていたよ」

お話を聞きながら、楽らくの窓からは麦畑がみえる。尋ね聞くエピソードが、様々な時代の唐子^{からこ}の情景を想像させてくれる。



白瓜

木版刷りの手



普段利用者の皆さんが過ごしているお部屋のすぐ隣に多目的室というのがあって、滞在中、私はそこで木版画の制作を行っていた。新しい植物のエピソードが増えると、そのたびに植物の絵を描いて、版木に彫刻刀で彫る。版ができると、利用者さんを部屋に招いて、刷りの工程をみてもらう。

四月に入って二度目の滞在が始まったところには、2回、3回と続けてみてる方もいらっちゃった。

ある日「私も刷ってみたい」という声が、久しぶりに楽しくにいらした利用者さんからあがった。その一声が流れを変えて、えいっと勢いで、挑戦してもらうことになった。

和紙ではなくコピー用紙。一人が刷

りに挑戦すると、お隣の方もやりたと言った。

私がやってみせるとどうしても「先生」のようになってしまう。利用者さんや職員さんが参加し始めると、もっとフラットに、そこに垣根がなくなるような瞬間があつて嬉しかった。

体重をかけて力強く馬簾を使って刷る人、その人のようにやさしく柔らかな墨で刷られた牡丹、自分で刷ったスマイレの版画が乾くのがまだかと次の日も声をかけてくれる人。

お昼休みの三〇分ほどの時間、多目的室の小さな机で、版木を刷る手と、押さえてあげる手、応援する手、複数の手が重なりあつて、とても印象的な時間を過ごした。



神戸こうべの山越え

滞在中のアーティストは自転車を貸してもらえ。唐子地区に滞在しながら、上唐子、下唐子、近所のスーパー、焼き鳥屋、銭湯、空いた時間や休日には自転車を漕ぎ、周辺を散策していた。

三月のある日曜日、自転車で三〇分程先にある動物園に行ってみることにした。行きは車が行き交う国道を走った。思っていたより距離があった。自転車で来る場所ではなかったかと思いつつ、喫茶店で頂き物のポタ餅をいただいたり、田んぼ道の菜の花畑を撮影していたら話しかけられたり、東松山の方々のあたたかさに触れる瞬間があった。帰りは別ルートで健康センターに立ち寄って

お湯に浸かりたかったのだが、山道を越えなければならなかった。引き返すには遠すぎて、覚悟を決めて自転車を押して、すれ違う車にびくびくしながら峠道を越えた。

「よく神戸の山を越えてね、友達の家まで行ったの」

利用者さんとの会話の中では、様々な土地の名前があがる。ここに通う方の中には、昔からこの辺りに住んでいる方もいれば、東松山、埼玉、東北、八丈島、大阪河内など、私が聞いただけでも、日本の中の様々な地名があがってくる。

どうやら「神戸」という地名は、このまゑ通った峠のあたりのことだと

わかった。

唐子地区で自転車を漕ぎながら、いくつもの地名に出会う。この土地の解像度が少しだけあがるとともに、利用者さんのかつてのエピソードをなぞるような瞬間に思いがけず遭遇する。そのたびに、自分の足で出会えたという喜びが溢れて、絵に描いてみたくなるのだった。



じいば 春蘭

「じいば、という植物があつて、むかしみんなでじいばとよんでいた」

「青い葉があつて、人の形のような花が咲く。山で鳥が木の实を食べて、糞かなにかに種が混ざつて落ちて、芽がでたものを家にもつてきて植えた。」

でも谷に持つてくるとだめだね。

山の中だからこそ芽がでる。」

このあたりの地域では、春に山に咲く春蘭のことをじいば、じいばと呼ぶ。

花がほかむりをかぶつたおばあさん、ひげをはやしたおじいさんにもみえることからこう呼ばれるそうだ。

唐子、東松山、秩父出身の方々が、懐かしそうにじいばを語る。

昔は今よりもたくさん春蘭が自生していたようで、いくつものじいばの話聞かせてもらった。

この花の存在を知って実物がみてみたいくなり、東松山の道の駅を訪れた。

植物の売り場に春蘭が三つ並んでいて、ちょうど小さな花が咲いていた。

三月の滞在の最終日、購入した春蘭を楽らくに持ち帰って、利用者さんたちのテーブルをまわつて歩いた。

「きれいなね」「じいば」「なつかしい」

仙台に帰って、青葉山の植物園エリアを歩くと、自生する春蘭をいくつかみることができた。

たまたま訪れていた京丹後の山でも、一輪きれいなじいばが咲いていた。

行く先々で春蘭をみつけることが嬉しくて、その都度「じいば」とつぶやいた。

四月にふたたび東松山に戻ると、楽らくでアーテイストが寝泊まりする部屋のテーブルに、じいばが置いてあった。

花は見ごろを終えていたが、葉は生き生きとしていた。来年また花がみられるようにと、楽らくの花壇に植えてもらった。



じいば 春蘭

ワラビ

四月、和紙を買いにいった小川町の産直でワラビがたくさん並んでいた。

二週間の一人の滞在、食べきれぬだろうかと迷っていたら、「ワラビひとつどう？」と声を掛けられた。お母さんが半額にしてくれて、これで帰れるわと言って、オウバイモドキという花までくれて。

戻ってすぐに、楽らくの花瓶に生けてもらった。ワラビは重曹でアク抜きして一週間くらい楽しんだ。

「家族がワラビを採ってきて、産直に卸してるの」
楽らくにはもともと農業をされていた方も多く、山菜の話からそんな声が聞こえてきた。

版画を彫る前に、すでに山菜の絵柄のぬりえをしている方がいた。

「茶色い感じ、緑色じゃないんだ。」

調べてみたら、ワラビにも三種類あるらしく、青ワラビと黒ワラビ、赤ワラビというのがあるそう。

「ワラビは昔、山の方から採ってきて苗を植えたけど、きれいなところでは育たなくてだめね。山の中の鬱蒼としたところじゃないと育たない」

何色も重ねながら、きっと黒ワラビの、繊細な色を表現していた。



ワラビ

すみれ

はじめて参加した楽らくの朝の会。

司会をする職員さんたちの掛け合いが素晴らしくて、毎朝その場があたたまって一日が始まっていくのを利用者さんの隣で一緒にみていた。

滞在中の朝の会では、活動の様子を紹介してもらう時間を作っていただいていた。

前の日に彫り終えた版画を、「今日の植物です」といつて紹介する。

そうして一言植物の話をし終わると、席から「こっちこっち」と手招きしてくださる方がいた。

傍に行くと、スマホで撮った庭のお花の写真をみせてくれた。

いつかお庭に行ってみたいですとお伝えした。

ある日、送迎にご一緒する機会あり、少しの時間、庭と玄関のお花をみせてもらった。

小さなスミレに、サツキ、サツキを植えたらくっついてきて生えてきたという紫の蕾の花。

職員さんたちも送迎に行くたびに

「花をみてって」「筈もらっていかない？」

と聞かれるそう。

次の方の送迎が待っているので、ゆっくりはしてられない。

ばたん、つつじ、チューリップ、道端や庭の話で盛り上がる。

春の楽らくは植物の話で溢れていた。



すみれ

送迎

楽らくの一室で目覚めて、朝の支度をする。七時半頃になると職員さんたちの声が聞こえてくる。八時頃に職員さんたちの朝礼があって、利用者さんたちを順番に迎えに行く。四月の滞在の後半で送迎に同行する機会をいただいた。利用者さんの中には植物が好きな方もたくさんいらして、家の庭の話をしてくれることが度々あった。私はこの日をとても楽しみにしていた。

車の後部座席に乗って迎えにいった、車に乗るときに使用する台を準備して、少し緊張しながら利用者さんを待つ。お一人で住んでいる方もいれば、ご家族が見送りに来る方もいる。ご挨拶をして、せつかならと少しの時

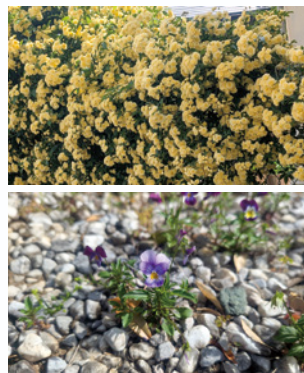
間、お庭の花をみせてもらう。楽らくへの道中、たまたま目に映った周辺の話をしたり、家族の話がでたり、そこから何気ない会話が生まれる。「この場所はもと〇〇でね」「いい眺めでしょ」「むかし、ここだね」

あまり話上手ではないので、コーディネーターの岩中さんと岡崎さん、藤原さんと一緒に席をまわって、職員さんたちにも助けてもらいながら会話のきっかけを探していた。一人だと緊張して話しかけにくいことが多かった。この日はドライブしながら、車の中の小さなスペースで、利用者さんともより打ち解けて話をした。その方の家の庭先で、少しだけ違う一面を垣間みせてもらえ

たような気がした。

もっと色々聞いてみたくても、次の送迎があるのでそこまで長くは居られない。

「あがつてよ」なんて言われたら、喜んであがつてしまいたいそうになる。あくまでも限られた時間、距離感を保ちながらも、できることをやりたいたいと思いつつ日々を過ごしていた。



版画と水やりが交差する時間

楽らくの中庭にはいくつか植物が植わっていて、真ん中には空間があり、いまは遊び心あるドライバーさんの手で芝が「楽らく」の文字に刈り整えられている。休日は隣のテニスコートのボールが落ちていたりするけど、翌日にはきれいになっていく。楽らくの開けた庭からは、何か新しいことが生まれそうな自由な雰囲気漂っている気がする。

ある朝、中庭にたくさん花の苗とプランター、土袋が置いてあった。花を分けてもらったので、中庭に植えるということだった。

職員さんたちが、おそらくその日のコンディションなど含めて、花が好きそうな方を考えて、利用者さんへ手伝ってほしいと声を掛ける。

そのとき部屋の中では朝の体操が行われていて、中庭の変化に気づいている人は少ない。

庭では手際よく花を植えている。とても手際が良いので、普段からお家でもやっているんだらうなと思う。中にいる人たちが少しずつ花を植えていることに気づき始めている。

「同時に二つのことが起きているとあって、おもしろいですよね」クロスプレイの藤原さんの一言に、ここでの滞在の中で起きる一瞬の出来事の豊かさを、少しだけ教えてもらった気がした。



あみがさゆり

楽らくの周辺には様々な取り組みを行う施設や、人が住んでいる。

そうした方たちを滞在中に尋ねたり、こちらに招いて活動をみていただいたりもした。

乗馬クラブなどもあって、夕方と朝に近くを通ると、馬がのびのびと歩いている様子に癒される日もあった。ある日、近くにある「子ども文化村」という施設を訪ねた。

花に溢れた庭の向こう側には都幾川がみえて、図書館や美術館、こどももおとなも自然の中で文化に触れたり、あるいはその場に滞在しながらゆっくりとただただ考える時間をもらえるような、素敵な場所だった。話を聞かせてくれた方のお母さんも、以前は楽らくに通っていたと伺った。

文化村の庭を歩くと、アミガサユリという花が咲いて

いた。

アミガサユリの花は近寄ると、名前の通り小さな網目のようなものがあって、透き通るような繊細な模様が特徴的だった。

またある日、楽らくのテーブルの上の花瓶に、花が生けられていた。

よくみると、こちらもアミガサユリの花だった。

アミガサユリで庭と庭が繋がる瞬間。楽らくには花が好きな方が多くて、たまにお花を持つてくる方もいる。「きれいなね」と賑やかになる。すぐに職員さんが花瓶を持ってきて、テーブルに飾ってくれる。



アミガサユリ

みかんの木

滞在初日、楽らくから上唐子のあたりまで自転車を漕いだ。

冬に実ったみかん、キンカンにポンカン、柑橘類の乾いたものが、畑の木々にぽつぽつと残っているのがみえた。

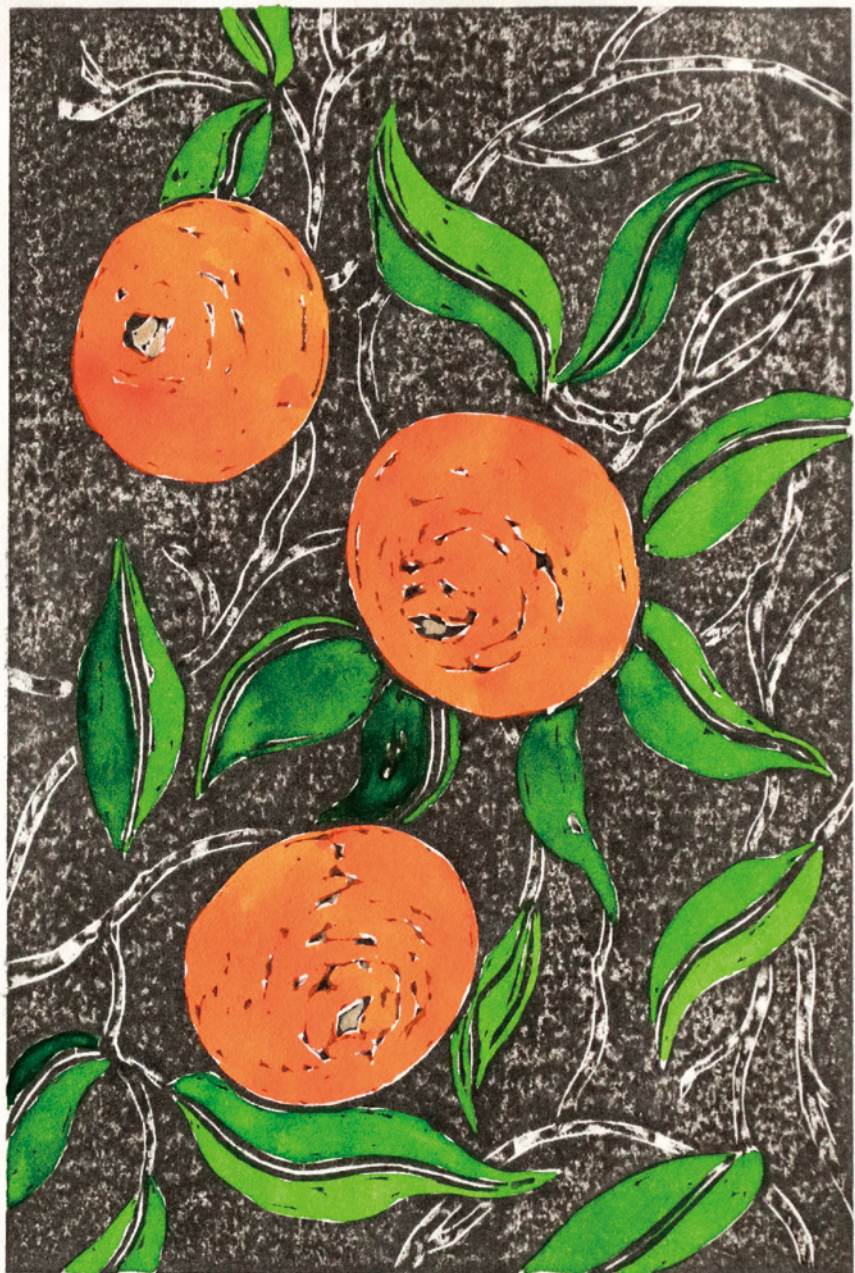
版画を並べて施設の中に展示していると、三人の方がミカンを指さして「うちにもある」と言った。

「庭にみかんの木があるよ。たしか苗は買った記憶がないから、どこからかもらってきたのかな。二〇年前くらいに植えました。

みかんは葉が落ちないし、ほっておいてもすぐ育つの。柿の木も前に植えてたけど、葉がおちるからね。

少しできたのを採って食べたり、近所の人にあげたりする。みかんはいいかもしれないですね。」

「庭にミカンの木があるけど、今年は食べ切ってしまった。小さいけど甘かったよ。この部屋よりも大きい庭、朝の時間に草むしりをしている。あんまり手入れはしてなくて。放っておいている。」



みかん

カタクリ

小川町にはカタクリの群生地がある。

三月の滞在の最終日、いまが花の盛りだと聞いて小川町を訪ねた。

この辺りだろうか、周辺を散策してみる。

よくよくみると、道路沿いの山一面にカタクリの花が満開に花を咲かせていた。

小川のカタクリは、数年前に楽らくのお花見で見に行ったことがあると聞いていた。

「まえに、ここの人たちと行ったことがないっけ？ 紫色の花、なんだったかな」

職員さんに聞いてみると、〃ヘメロカリス〃という花をみにいったことがあるそうだ。

利用者さんたちがこれまでにみてきた花が重なって、カタクリとヘメロカリスのエピソードが混ざりあっていた。

カタクリの花は持ち帰れなかったが、このエピソードを覚えてくれた方がいらっしゃる曜日をめがけて版画に彫って、きれいでしたよと報告した。



カタクリ

刺し子の時間

午後、利用者さんはレクリエーションをしたり、塗り絵をしたり、毎月誕生会が開かれたり、みんなで過ごす時間も様々である。

アーティストは、ここに混ざっても良いし、他の場所で過ごしていても良い。

ある日、刺し子の時間に参加させてもらった。塗り絵をする人もいれば、裁縫が得意な方は刺し子をやっている。

それぞれ白い布に描いてある絵柄に沿って、布の上を針と糸で行ったり来たりしている。たまに糸通しをお願いされることもあれば、糸の色を変えてと頼まれて、それをきっかけに会話がはじまる。

この日は隣に座っていた利用者さん

が、昔よくお母さんに服を作ってもらった話をしてくれた。そして娘さんの持ち物に何度も名前の刺繍をしてあげたことを話してくれた。

子どものころに戻って、あのとき嬉しかった話、娘さんが喜んでくれた話が何度か繰り返し返された。それはこの方にとって、とても大事なエピソードなのだとおもった。

記憶の中に刻まれた様々な時期のお話を何度か行き来しながら、手元では針と糸を繰り返し反復させて、線と絵ができあがっていった。



利用者さんの作品

塗り絵が完成すると、トイレやお風呂に行く途中に通る廊下の壁に作品を展示してもらった。

絵柄は同じで、色鉛筆の色も種類が限られている。同じような塗り絵になるかもしれないと思っていたが、本当にすべて違うものになっていた。植物の持っているものとの色に忠実に、よく観察するように色を付ける方もいれば、色に縛られず南国のフルーツのような鮮やかな草花や野菜を完成させる方もいた。

背景の色を決められないと言った男性の利用者さんに、「青かピンク、どっちが良いですか?」と聞いてみると、職員さんから「〇〇さんは情熱的だから赤じゃない?」と返ってきた。「なんでも良い」と言いながら、

ピンクの色鉛筆を手にとって力強く塗られていたのが印象的で、それが皆の目を引くとても良い絵だった。

またある日、展示した塗り絵をみた女性の利用者さんが少し不機嫌そうにみえたときがあった。

この方は初日から話かけてくれた方で、アーティストがこの場に来ることや、この活動自体をとっても楽しみにしてくださっていたように思えた。

自分がこれから描くぞというタイミングで、他の方の作品が既に展示してあったことで、「答えを先にみてしまった」という感覚になってしまったのかもしれない。たま

たま曜日のタイミングが合わなかったりして、順番が最後の方になってしまっていた。

このとき私は少し動揺してしまっただけで、「みんなと同じことはしたくない」という、その方の意思が、強く伝わってくる瞬間だった。



ぼたん園

東松山駅のすぐそばに、やきゅう箭弓稻荷神社といううけもの保食神を祀った神社がある。

この神社の敷地内には牡丹園があり、東松山の名所のひとつになっている。

三月の牡丹園を訪れてみると、まだ背丈は二〇〜三〇センチくらいだ。

赤紫色の芽がでていて、花が咲くのはまだ先のようだ。

四月の滞在でふたたび箭弓神社の牡丹園を尋ねると、大きな牡丹の花でいっぱいになっていた。

ピンク、白、紫、薄紫、赤と白が混ざったものの、様々な品種が並んで、立派な名前がついている。

ツツジや藤も満開で見事だった。

花の隣には、提灯が飾られて、食べに行った焼き鳥屋

の店名が書かれている。

園内をまわりながら、近くのデイサービス施設の方々とすれ違う。

楽らくにもどって、すぐに大きな牡丹の版画を彫った。

利用者さんにみせると、

「うちにも大きな牡丹の花があるよ。赤い花」

「黄色の牡丹があるから見にいたらいよいよ。食べることもあるよ」

と教えてもらった。葉を食べるといのは初めて聞いた。

もしかしたら葉牡丹のことだったのかもしれない。

華やかな牡丹の版画は利用者さんに人気の一枚になって嬉しかった。



牡丹

菜の花

三月の後半、楽らくの皆さんでお花見に行くのだと聞いた。

嵐山駅らんざんの近くに桜並木があつて、ちょうどその手前に、満開の菜の花畑が広がる場所がある。

楽らくのある唐子地区を車で通り抜けて嵐山方面に向かう。歴史ありそうな家々が立ち並んでいる。

少し早い時期にその道を訪れてみると、桜はまだ蕾だった。黄色い菜の花だけが一面に、満開に咲いていた。

おそらく町で管理しているもので、昔はこの辺りの人たちが菜種油などを作っていたと教えてもらった。

利用者の方の中には農業をされていた方もいらっしやつて、その方も昔は菜の花を栽培していて、菜種油も試したことがあると話してくれた。

四月、ふたたび東松山に戻ってくると桜は見ごろを終えていたが、菜の花はずっと咲いていた。

冬を越した白菜からそのまま芽を出して咲く菜の花もあれば、都幾川の土手や森林公園駅近くの工場の片隅で、そこかしこに咲いていた。この春の、唐子の風景の一部になった。菜の花を見ると、ここでの時間を思い出そうだ。



菜の花

避難訓練

ある日、避難訓練があった。

外の駐車場にイスを移動させて、来た順番に並んでいく。足腰が痛い方はイスに座ってもらう。いつもは座っている方でも、「〇〇さんは立つてられそう？」と職員さんが聞くと、積極的に立っていきくれる方もいた。むしろ嬉しそうにもみえて、まだまだ元気であることはその人の自信につながる。祖父もそうだったなと思ひ出したりする。

座って待機していたとき、車いすに座っていた女性が手をのばして、「寒い」といった。そのひとは、普段あまりレクリエーションや体操などに積極的に参加をされていない方で、体調が悪いのかなとか、興味がないの

かな、と最初の頃は勝手なことを考えてしまっていた。

避難訓練の日、手をにぎってあげると、訓練の間、ずっと握り返してくれていた。言葉ではなく、違う部分で少しだけ通じあえた気がして、その日をきっかけに、積極的に話しかけるようになった。

この日はとてもあたたかな陽気の日で、職員さんが歌い始めると、いつの間にか合唱がはじまって、嘘みたいな奇跡のような時間だった。



浅野友理子

画家。1990年宮城県生まれ。2015年東北芸術工科大学大学院芸術文化専攻洋画研究領域修了。

様々な地域を訪れ、土地ごとに受け継がれる植物の利用方法や食文化、女性の手仕事について聞き歩き、それらを絵画で記録するように制作を行っている。

「第3回絹谷幸二芸術賞」受賞、「VOCA展2020 現代美術の展望—新しい平面の作家たち」大原美術館賞受賞。「国際芸術祭あいち2025」、「Artist-in-Residence Program 2024 “SPINNING SCAPES”」国際芸術センター青森に参加。



「人が人としてかけがえのない人生を豊かに過ごすためには、Cure(治療)のための医療だけでなく、Care(介護・福祉)の力、そして何より自己実現のためのCulture(文化)が必要である」という理念のもと、医療法人社団保順会が運営するデイサービス。

2007年、埼玉県へのそといわれる東松山市唐子地区に開所。「らくに たのしく その人らしく」をモットーに、加齢による病気や障害等によって介護や手助けが必要になっても、住み慣れた地域でその人らしい豊かな暮らしを続けられる場を目指し、専門性をもつスタッフが、一人ひとりに寄り添うケアを大切にしながらサービスを提供している。

2022年6月には、介助という行為を提供するだけでなく、アートを通じた「よりクリエイティブなケア」の実践を目指し、アーティスト・イン・レジデンスを併設した施設へ移転・新築。現在は、ケアとアートを横断する取り組みとして「クロスプレイ東松山」を実施している。



クロスプレイ東松山

医療法人社団保順会と一般社団法人ベンチが共同で実施するアートプロジェクト／文化事業。

埼玉県東松山市の高齢者福祉施設「デイサービス楽らく」を拠点に、ケアとアートがクロスする実践を地域で展開している。中心的なプログラムとして、さまざまな分野のアーティストが福祉施設に宿泊・滞在し、施設利用者や職員をはじめ、地域住民と交流しながら制作を行う「アーティスト・イン・レジデンス」を実施している。

また、地域のさまざまな団体と連携し、小学校などでのアウトリーチ、地域交流サロン、アーティストによる作品発表やワークショップ、文化祭など、多様な文化活動を展開している。さらに、プロジェクトの過程で生まれるさまざまな出来事や実践を記録・言語化し、その意義を広く社会へ発信している。

福祉の現場をはじめ、地域の日常には、意識されることなく育まれている「ケア的なもの」が数多く存在する。本プロジェクトでは、アートを介した実践を通して、それらを活動に関わる人々の視点から再発見し、地域に根差した豊かさを共有することを目指している。その積み重ねにより、開かれた文化的コミュニケーションが生まれ、ケアとアートの考え方が根付いた福祉や地域のあり方を提案している。



クロスプレイ 東松山

浅野友理子「じいばの花」

執筆：浅野友理子

版画：浅野友理子

写真：吉田尚平、岩中可南子、岡崎彩音、浅野友理子

デザイン：北風総貴（ヤング荘）

編集：藤原顕太

＜プロジェクトチーム＞

企画：武田奈都子（保順会）、藤原顕太（bench）、武田知也（bench）

コーディネート：岩中可南子、岡崎彩音、藤原顕太

＜プロジェクトパートナー＞

デイサービス楽らく利用者／職員

主催：医療法人社団保順会、一般社団法人ベンチ

助成：公益財団法人 福武財団「アートによる地域振興助成」（2025・26年度）

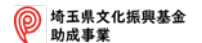
埼玉県文化振興基金助成事業（2025年度）

東松山市文化芸術推進事業補助金対象事業（2026年度）

後援：東松山市教育委員会（2026年度）



公益財団法人 福武財団



発行：

医療法人社団保順会

埼玉県東松山市大字新郷29-3

TEL. 0493-23-9045

一般社団法人ベンチ

埼玉県川越市宮下町2-17-4

TEL. 050-5369-5637

2026年8月22日発行

©Medical Corporation Hojunkai & bench.Co All Rights Reserved. 無断転載複写禁止

